

令和6年度 学校経営計画・学校評価			☑4月4日提出	☑10月3日提出	☑3月14日提出	学校番号	47	清水	高等学校	課程	定
高知県の教育の基本理念	(1) 学ぶ意欲にあふれ、心豊かでたくましく夢に向かって羽ばたく人 (2) 郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人 (3) 多様な個性や生き方を互いに認め、尊重し、協働し合う人		基本方針	① 予測困難な社会を生き抜く力を身につけるための教育の推進 ② 多様な背景・特性・事情等を踏まえた包摂的な教育・支援の推進 ③ 生涯にわたって学ぶことができる環境づくりと活動・取組の推進 ④ 各種施策を総合的・計画的に推進するために必要な基礎的・基盤的な環境・体制等の整備							
	【アドミッション・ポリシー】(入学者受け入れ方針) ① 地域の自然や文化に興味を持ち、多くの人とかかわりながらコミュニケーション力を高めたいと考えている生徒。 ② 中学校までの学習内容を学びなおし、さらに発展させようと努力する生徒。 ③ 動くことや地域で貢献することに関心を持ち、自分を高めるための新たな学習にチャレンジできる生徒。			【カリキュラム・ポリシー】(教育課程の編成・実施方針) ① 一人ひとりに寄り添った指導・きめ細かな指導を行い基礎学力の定着を目指します。 ② 特別活動や体験活動を通して、他者と協働することやチャレンジすることの大切さを身に付けます。 ③ 生徒一人ひとりのペースに応じた学びが可能です。							
スクール・ポリシー	【グラデュエーション・ポリシー】(育成を目指す生徒の資質・能力) ① 「人とかかわる力(コミュニケーション能力)」 ② 「最後までやりきる力(キャリアデザイン能力)」 ③ 「新しいことにチャレンジする力(チャレンジ精神)」										

学校関係者評価		
【学力の向上】	評価	【 B 】
不登校を経験し、基礎学力の定着に支援が必要な生徒たちが比較的良好に出席できている。また、「学校の授業は、よく理解できている」と肯定的に答えており、欠点保持者もいない。今後、家庭学習や課外学習の環境が整えば、学力の向上も期待できる。		
【社会性の育成】	評価	【 A 】
学校行事や体験活動、進路活動を通して、着実に社会性が身についている。また、新しいことにチャレンジしようとする生徒が増えている。幼少期から生徒たちを支えてきた関係機関からもその成長ぶりについて高い評価を受けている。		
【チーム学校】	評価	【 B 】
アンケート結果から、生徒たちにとって学校は安心できる居場所となっていることが伺える。教職員が生徒一人ひとりに真摯に向き合い支援・指導している結果であるとする。高台移転を期に、これまで以上に地域と学校が一体となった教育活動を展開することを期待する。		

		育成を目指す資質・能力【P】	現状と目標(評価指標)	具体的な取組内容【D】	中間評価【C】	中間評価後の取組内容【P・D】	年度末評価【C】	見直しのポイント【A】
重点項目	学力の向上	★確かな学力 ○基礎的・基本的・発展的な知識及び技能 ○思考力、判断力、表現力等 ○学びに向かう力、人間性等 ★将来を見通した学び ○将来にわたって学び続ける意欲(学習習慣を含む)	○県オリジナルアンケート問8「学校の授業はよく理解できている」の肯定的な回答 【現状】R5年度2回目(100)％→R6年度2回目(90)％以上 ○出席率 【現状】R5年度3学期(87)％→R6年度3学期(90)％以上	・教員間や教育機関と生徒情報を共有し、個々の生徒に応じた指導や生徒指導・支援を行う。 ・授業において、ICT機器の効果的な活用や補助教材の工夫を行う。 ・学期ごとの面談週間や保護者面談を通して、生徒の学習状況や学校に対する満足度を把握する。 ・観点別学習評価の実践事例を共有し、その質を高める。	B ○県オリジナルアンケート問8の肯定的な回答 【中間結果】R6年度1回目(92)％ ○出席率【中間結果】R6年度1学期(90)％ 学校の授業が理解できているという肯定的な回答率は高い。定時制生徒は、出席率と学力の相関が強いと考えられるため、欠席の多い生徒への支援を根気強く続ける必要がある。	・6月下旬、10月下旬に関係機関や保護者を招いての参観授業を実施し、授業改善に活かす。 ・個別最適化デジタルドリルの利用率などを意識したICT機器活用の推進。 ・欠席の多い生徒については、SCやSSW、家庭や関係機関との連携を密にし、登校支援をする。	B ○県オリジナルアンケート問8の肯定的な回答 【結果】R6年度2回目(92)％ ・問8について肯定的な意見が多いものの、学力向上にかかわる授業以外の学習時間が不十分であり、今後の課題である。 ・不登校生徒や出席が難しくなっている生徒に対する登校支援は昨年度以上に密に行ってきた。	・個別最適化デジタルドリル等を活用した授業以外の学習時間の確保に努める。 【評価指標】 現在の指標は維持し、新たに県オリジナルアンケート問2「あなたは授業以外で、平日の1日平均どの程度勉強していますか」の肯定的回答を10P向上させる。を追加する。
	社会性の育成	★豊かな心 ○自己存在感、自己有用感、コミュニケーション力、自己決定力等 ★多様性・包摂性 ○キャリアデザイン力(やりぬく力) ○他者への思いやり(地域・社会貢献、ボランティア活動等も含む)	県オリジナルアンケートの肯定的な回答 ○問25「立場や年齢、考え方の異なる相手でも、その意見を聞き、理解しようとしている」 【現状】R5年度2回目(100)％→R6年度2回目(90)％以上 ○問28「解決に時間がかかる事でも、最後まで考えたり、行動したりしている」 【現状】R5年度2回目(87)％→R6年度2回目(90)％以上	・体験学習や異学年交流活動において、発言する機会を多く設定するなど、自己肯定感を高める活動を取り入れる。 ・体験学習等において、「やりぬく力」「かかわる力」に繋がるように、「あきらめない」「人と接する」を意識した活動を計画する。 ・新しいことにチャレンジすることの大切さを日々促す。	B 県オリジナルアンケートの肯定的な回答 ○問25【中間結果】R6年度1回目(92)％ ○問28【中間結果】R6年度1回目(75)％ 問28の肯定的回答が若干下がった。特に新入生は今後、いろいろな経験を積むことで、「やりぬく力」「かかわる力」がついてくると期待している。	・特別活動等において、自己表現活動の機会を多く設定する。 ・学校行事や体験学習の参加率は高く、取り組む姿勢や態度もよい。引き続き「かかわる力」「やりぬく力」を養う。	B 県オリジナルアンケートの肯定的な回答 ○問25【結果】R6年度2回目(84)％ ○問28【結果】R6年度2回目(50)％ ・肯定的回答が下がり、問25は－8P、問28は－25Pとなった。	・年間を通じて、各自1つは設定目標にチャレンジさせるなど、自己肯定感や「やりぬく力」の向上につなげる。 【評価指標】 県オリジナルアンケート本年度末より問25を6P向上、問28を10P向上させる。
取組項目	地域協働学習	【取組のねらい】 ○生徒の社会的自立・社会参画に必要な資質・能力の育成 ○地域・関係機関との連携	県オリジナルアンケートの肯定的な回答 ○問19「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」 【現状】R5年度2回目(75)％→R6年度2回目(60)％以上 ○問21「高校入学以降、地域や社会をよくするために、地域貢献活動やボランティア活動などを行ったことがある」 【現状】R5年度2回目(0)％→R6年度2回目(30)％以上	・学校行事や異学年交流活動において、発言する機会を均等に設定し、「かかわる力」を養う。 ・SCやSSW、関係機関と連携し、生徒の特性に関する研修や生徒へのソーシャルトレーニングを実施する。	C 県オリジナルアンケートの肯定的な回答 ○問19【中間結果】R6年度1回目(41)％ ○問21【中間結果】R6年度1回目(8)％ 問19や問21については、例年著しく低い値である。ここで問われている社会参画や地域貢献に関しては、定時制の生徒に特に身につけてほしい資質・能力である。	・引き続き、学校行事や異学年交流活動において、「かかわる力」を養う。 ・アセスの実施と教員への研修会(1学期6月実施済・2学期10月予定) ・生徒へのソーシャルトレーニング(1学期6月実施済・2学期10月予定)	B 県オリジナルアンケートの肯定的な回答 ○問19【結果】R6年度2回目(42)％ ○問21【結果】R6年度2回目(84)％ ・7月に行った地域清掃活動の前夜で活動の意義を理解させる等の手だてを図ったことで、問21の肯定的回答が著しく向上した。	・地域貢献活動の回数を増やす、ソーシャルスキルトレーニングを継続する等の手立てにより「かかわる力」を養う。 【評価指標】 県オリジナルアンケート本年度末より問19を10P向上、問28は現状維持を目指す。
	教科横断的教育	【取組のねらい】 ○学習の基盤となる言語能力や情報活用能力の育成 ○各教科の学びを実社会での課題発見や解決に結び付ける力の育成	○各教科において言語活動や情報活用能力を育成する場面を意識的に設定した回数の増加 ○県オリジナルアンケート問22「高校入学以降の学習によって、環境や社会の問題に対する意識や行動に変化があったと思う」 【現状】R6年度2回目(60)％以上	・各教科において、探究的な学びを推進し、自己の考えを適切に表現する機会を設ける。 ・ICTを効果的に活用した授業改善を行う。 ・生徒が自身の思考を高めるための発問や振り返りを工夫する。	B ○問22【中間結果】R6年度1回目(50)％ 夏季休業中の時間を利用して、若年教員の模擬授業を企画し、探究型の授業について定時制全教員で学ぶ機会を設けた。また各教科の授業の中で、ICTを効果的に活用した事例を教えあった。	・探究的な学びや思考を深める活動を各教科で展開する。 ・総合的な探究の時間の中で、地域の課題発見や解決に結びつけるプログラムを取り入れる。	B ○問22【結果】R6年度2回目(67)％ ・総合的な探究の活動に連続性を持たせ、単発的な内容から継続的な内容となるように工夫した。(創作活動、防災活動、農業体験等)	・探究的な学びや思考を深める活動を各教科で展開させ、総合的な探究の時間に地域の課題発見や解決に結びつけるプログラムを取り入れる。 【評価指標】 県オリジナルアンケート問22 現状維持を目指す。

		取組のねらい【P】	現状と目標(評価指標)	具体的な取組内容【D】	中間評価【C】	中間評価後の取組内容【P・D】	年度末評価【C】	見直しのポイント【A】
チーム学校	学校の振興	★学校の魅力化 ○生徒数確保 ○地域や関係機関と連携した学校振興	○県オリジナルアンケート問7「ホームルームでは安心して過ごすことができる」 【現状】R5年度2回目(100)％→R6年度2回目(90)％以上 ○学校評価アンケートのR5年度末結果と今年度の目標「本校の学校行事は満足のものですか」 【現状】R5年度末(100)％⇒R6年度末目標(90)％以上 ○定時制教育振興会の活動を維持し、定時制教育への理解と協力を図る	・関係機関と連携し、生徒にとって安心できる居場所となるような支援を行う。 ・定時制通信(年3回)と夜光虫(年度末)を発行する。 ・ホームページを利用し、学校の様子などを定期的に発信する。	B ○県オリジナルアンケートの肯定的な回答問7【中間結果】R6年度1回目(100)％ ○定時制教育振興会の活動 定時制振興会総会の実施6月 定時制通信の発行7月	・体験学習(陶芸・農業・藍染等)を実施し、生きる力の涵養や心の豊かさの形成を図り、多様な生徒の「居場所」づくりを行う。 ・ホームページを定期的に更新し、学校の様子などを積極的に発信する。	A ○県オリジナルアンケートの肯定的な回答問7【結果】R6年度2回目(84)％ ○学校評価アンケート「本校の学校行事は満足のいくものですか」【結果】R6年度末(100)％ ○定時制教育振興会で予定していた内容は滞りなく実施できた。 ・生徒会が中心になり、生徒が主体的に活動・発言できる機会や場面を多く設定した。	・不登校を経験した生徒にとって安心できる居場所となるような支援を行う。 ・定時制振興会活動の存続 【評価指標】 県オリジナルアンケート本年度末より問7を6P向上させる。
	不祥事防止	★教職員の倫理観の堅持 ○不祥事防止対策の徹底 ○よりよい職場風土づくり ○教職員のメンタルヘルス ○不祥事発生時の適切な対応	○現状課題 法令遵守の注意喚起 ○校内研修の実施回数3回 ○不祥事防止委員会の実施回数3回	・報告・連絡・相談の励行。 ・校内研修会の情報共有。 ・不祥事防止チェックリストの活用。	B ○日々の打ち合わせ会のなかで、報道された不祥事事例などを共有し、意識喚起をした。 ○校内研修会及び不祥事防止委員会を2回実施した。(4月・6月) ○個人情報を含む文書等の取り扱いに関するマニュアル(ガイドライン)を作成した。	・報告・連絡・相談がスムーズにできるよう環境を整備していく。 ・定期的に意識喚起を継続していく。 ・校内研修会を実施する。	B ・「学校の安心・安全を守る」研修会(中学校教員、同窓会、商工会、振興会等の参加あり)を実施、校内不祥事防止宣言を作成し、不祥事撲滅に向けた啓発を行えた。 ・年間を通して啓発を継続することは、自分事としてとらえるよい機会となっている。	・定期的な校内研修会や啓発活動を実施する。
	働き方改革	★長時間勤務の解消 ○風通しの良い職場環境 ○やりがいを持って公務に取り組める体制の構築	○出張や休暇取得時に時間割変更が円滑に行われるなど、教員間の協力体制の構築 ○勤務時間外業務の削減 ○公務系端末を活用した業務改善として、電子決裁率50％以上	・夏季休業期間に閉庁日を設定する。 ・出張時等において、時間割変更を行い、自習時間0を目指す。 ・サービスの勤務時間外業務の削減 ・公務系端末の有効な活用方法に関する周知会を実施する。	B ○閉庁期間の設定(8/13～8/16) ○時間割変更により自習時間0が維持できている。 ○勤務時間外業務の削減ができている。 ○6月末の清水高校の電子決裁率98.1％	・教員間の協力体制ができており、チームで業務に取り組んでいる。 ・引き続き、働き方改革の視点で業務改善を行い、今後も風通しの良い職場づくりを目指す。	B ○出張や休暇取得時の時間割変更が円滑に行われるなど、教員間の協力体制ができている。 ○月45時間を超える時間外勤務を行った定時制教職員は0であった。 ○公務系端末を活用した業務改善として、電子紙の決裁率を定時制において、100％を意識してきた。	・閉庁期間の設定 ・業務の精選と分担 ・年休等の取得率の増加